
今日も、彼女は跳ぶ

瀬川愛以

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日も、彼女は跳ぶ

【Nコード】

N1162F

【作者名】

瀬川愛以

【あらすじ】

変わりものの『彼女』のまわりに迷惑をかけまくる日常です。

1 彼女は、目覚める。

あの日、あたしが先生に聞いた、人生最大の疑問。

「先生」

「はい」

「先生は、ロリコンですか」

「違います」

「じゃあ、あたしは襲われる心配ないですね。ああ、よかった」
「ないです。安心してください。そして、帰ってください」

「帰りません」

「なぜですか」

「むしろ帰れません」

「ですから、なぜですか」

「先生がロリコンと認めるまで、帰りません」

「認めません」

「先生、うそはよくないですよ。それに、証拠もあります」

「認めません。証拠とはなんですか」

あたしは一枚の写真を茶封筒からとりだす。

「これ、篠原礼加しのはられいかですよ。先生、ガン見じゃないですか」
「気のせいです。学校にカメラを持ってきてはいけません」

「うそです。篠原礼加を学級委員にしたのは、先生じゃないですか」
「それは、そうですね、篠原さんは頭もいいし、人気者ですし」
「それに、先生の好みですからね」

「先生の好みなんて、みんな知ってますよ。態度がちがう」

「差別はしていません」

「してます」

「していません」

「してます!」

あたしは大声を出した。

「頭がいい。もの静か。男にこびない。女ともだちが多い。先生とうまい関係がつかれる」

あたしは先生の好みの女性像を淡々と口にした。

「髪が長い。栗色。前髪をピンでとめている。目が大きい。まつげが長い。」

先生は、あたしの口から出る言葉が宙に浮かんでいるかのように、色のない空気を見つめていた。

「指が細い。色が白い。背が高い。足と手が長い。顔が小さい」

あたしは篠原礼加の特徴を次々といった。あたしの目から涙が出ているのに気づいた。

「先生は、あたしに優しい。先生の好みじゃないからです」

「ですから、差別は」

「先生は、好みの子には厳しいです。かわいい子には旅をさせたいからです」

「正直にいいましょう」

「はい」

「篠原さんが、好みであることは認めます」

「じゃあ、篠原さんが好きなんですね」

「そういうわけでは」

「あります。聞きました。好きなんですね」

「ですから、泣かないでください」

先生はハンカチをあたしに差し出した。うすい水色でいかりのマークが青でししゅうしてある。

「かわいいですね」

「いいから、はやく涙をふいてください」

あたしはおとなしく目にハンカチを軽くあてた。洗剤のにおいが鼻をかすめる。

「あたし、なに座か知ってますか」

「いえ」

「みずがめ座です。二月十六日生まれです」

「そうですか」

あたしは手をポケットにいれてひっかきまわした。

「今日の占い、見ましたか」

「いえ」

「みずがめ座、七位でした。びみょうですよね」

「そうですか」

あたしの手がおめあてのものをつかんだ。

「ラッキアイテムがボイスレコーダーだったんですよ」

先生の顔に汗がひとすじ流れる。

「使い方わからなかったんですけど。……ああ、なんかボタン押しちゃってました」

あたしが再生ボタンを押すと、『先生は、ロリコンですか』と聞く

あたしの声が聞こえた。

「これ、どうしましょう。そういえば、篠原さん、こんなもの欲しいって言ってたっけ」

あたしはボイスレコーダーをくるくるとまわした。

「なにが目的ですか」

「あたし、新しい部をつくりたいんです。顧問になってもらえませんか」

「そうしたら、それはどうするんですか」

「どうしましょうかね。まあ、考えますよ」

先生は地面をみつめている。七分ぐらい経った。先生がうーんとうなる。

「では、どうしましょう」

「ありがとうございます」

あたしは最高の笑顔で先生にお礼をいった。

それからあたしはさっさと靴をはいて外に出た。
空が曇っている。風があたしの黒い髪をなでる。

「ふん、嵐のまえぶれ、ってか」

あたしはそうつぶやくと、ステップを踏むように足で地面をはじいて歩いた。

あおいあんり
葵杏理、十四歳。

あたしが先生に聞きたかったのはあんなことじゃない。
なぜ、ひとはうそをつくんですか。

2 彼女は、愛を語る。

あたしが抱えている人生最大の疑問。

「先生、お早いですね」

あたしは先生におはようのあいさつをした。

「おはようございます」

彼の名前は^{おおのかんじ}大野勸示。二十八歳。教師になって三年。

二年一組の担任、理科教師。

そして、二年一組の篠原礼加に恋をしているの。これは極秘なんですけどね。

篠原礼加は栗色の髪を赤いヘアピンでとめた、典型的な美少女。背が高くて、頭がよくて、女子にも男子にも人気もの。

でも、彼女は男ぎらいである。けっして男にこびない。おそらく先生もそこが好きになったのよ。

「あ、あんりだ。おはよう」

佐々木^{ささき}織がにへーと笑っていった。

「おお、杏理^{けいり}じゃん。はよ」

小泉^{こいずみ}明が片手を挙げていった。

「おはよ。今日もラブラブですね、きみたち」

織と明は中学一年生のころからつきあっている。

明とあたしは幼稚園からいっしょ。織は、小学五年生のときに転入してきた。

織はかぎりなくのんびりしている。彼女の言葉はすべてひらがなのような感じ。

まあ、そこがかわいいんだけど。くるくるした茶色い髪の毛には、

小さいお花のヘアピンが数個くつついている。それをふうわふうわさせながら『あんりー』とぽてぽて歩いてくる。

そのたびにあたしは『織ー！』と叫んで抱きしめてしまう。

あたしは男らしく椅子にどかっとな足を開いて座った。くせ。

「でも、あんりってあきらとおさなじみなんでしょう。すきになつたりしなかったの」

織が長いまつげをゆっくりぱたぱたさせながらいった。あたしは思わず頭をなでた。

「ない。あたし、年上の人が好きなんだもん」

「どうええ？」

織の顔があきらかに驚いている。

そうよ。あたしは年上のもの静かな人が好きなんだ。

「そーだよ。杏理ってずーっと昔から年上好きだったもんなあ。それに」

「それに？」

明の言葉に織の目がきらきらする。

「杏理って、黙ってりゃまあまあだけどさ、なんつうか、そのさあ」
明があたしにいつてもいいかと目で問いかけてくる。あたしはいえ
ばと目で返す。

「そこらへんのアホ女とちがって、いいたいこというじゃん、杏理は。男好きでもないし、ちゃらちゃらしてないけど、なんか、痛い
ところつくこというんだよね」

「ねえ、わたしもあほおんななの、あきら」

織が心配そうにいった。困った顔もかわいい。

「ちがうわ。アホ女っていうのは、女との仲をたもつのに必死なく
せに、男に色目つかってるやつよ。」

髪の毛とスカートの丈とまつげいじるのに夢中なんだから。おお、

みつともない」

あたしはスクールバッグからガムを取り出して、口のなかにほりこんだ。

「あ、俺も」

「わたしもー」

ガムを要求してくるふたりに仕方なく銀色の包みを一個ずつあげた。

「うわ、すっげミント。かれえ」

明が舌を出していった。

「あたし、甘いガムなんてやなのよ。甘くある必要性がない」

そうよ、あたしは強く生きるのよ。

男になんか頼らないわ。あたしは、大好きな人を追いかけたいんだもの。

木陰で彼は本を読んでいる。あたしは彼をみつめている。

あたしがクッキーを食べようとすると、わけてと彼はいう。

まん中で割ったクッキーを、ふたりで食べるの。そんな恋愛が理想だわ。

実際、二十六歳程度の王子様は現れないんだけど。

まだ、キスをしたこともないし、もちろん、それ以上のこともない。

手をつないだこともない。

あたしはまだ十四歳なの。男に頼らないといっても、父に養ってもらっている身。

なぜ、ひとは愛することをこわがっているんですか。

3 彼女は、前髪をみつめる。

そもそも、あたしが教師ぎらいなのは、訳がある。

「織と明、部活やってないでしょ。入部しようよ。まあ、強制だけどね」

あたしは食パンをかじりながらいった。

今は学校生活で唯一気の抜けるお弁当タイム。

あたしは六枚切り食パンを持参している。六枚のほうが絶対おいしいっていつてるのに、『食パンなんて、味ないじゃん』とかいわれると、すっごく腹立つ。

「部活か。やってもいいけどな」

明が紙パックのフルーツ牛乳をずこずこ音をたててすすりながらいった。海老天むすびとフルーツ牛乳はどうなのよ。

「いやだあ、あきら、げひん」

織がけけら笑っていった。織はみかんどっさりゼリーなるものをプラスチックのスプーンで口にはこんでいる。

やはり、弁当にもその人の性格があらわれる。この人たちがいい例だ。

明はやっぱり幼稚だ。あたしのタイプではない。あたしのタイプは、ざるそばを昼食に選ぶ人だもん。

「ふーん、篠原礼加はてづくり弁当ね。ありがちー」

あたしはとくに興味があるわけではないけどいつてみた。

篠原礼加は四人ぐらいで机をくっつけて弁当を食べている。

弁当箱はピンク色のだ円形。むだに小さい。ご丁寧に机にはオレンジ色のチェックのハンカチがしいてある。

篠原礼加にくっついていてる女子は、みんな篠原礼加にあこがれている。

できるだけ清楚に見えるよう、必死にがんばっている。
理由は簡単。みんな、先生に好かれたいのだ。

先生とは、もちろん二年一組担任の大野勸示のこと。

まあまあ顔も悪くないし、熱血でも嫌みでもないから、女生徒のあこがれの的になってはいる。

なっではいるけども。

彼は、ロリコンなのだ。

そして、よりによって篠原礼加が好きなのだ。

あたしは彼の弱みをにぎったことによって、新しい部活をつくることができるのだ。

それに、告白は録音してあるし、証拠写真だってある。

まだまだゆすってやるつもり。ちらつかせれば、ラーメンくらいはおごってくれるだろう。

まあ、無理矢理おごらせてやるけどね。

「結局、部活、どうすんのよ。まあ、強制だけどね」

「わたし、やるー」

織が今日のお昼ごはんを手帳に書きこみながらいった。まめだね。織がやるってことは、明ももれなくついてくるってことですね。

「そう。ありがと」

あたしにはやることがある。

さっそく、先生を見つけてゆすらなければ。

ポケットに手をつつこんで廊下で先生を搜索していると、篠原礼加がめずらしくひとりでしたので声をかけてみた。

「あら、篠原さん」

「葵さん」

篠原礼加は、あたしなんか話しかけられるとは思ってなかったんだろう。なんか、っていうのはひっかかりますけどね。

「ご用件は？」

篠原礼加が単刀直入にいった。

「とくに、用があるわけではないんですけど。先生のこと、どう思います？」

あたしは適当に質問した。近くで篠原礼加のファンが騒いでいる。

「うーん、いい先生とは思うわ。でもちよっと」

「ちよっと？」

「ちよっと、ゆるいわ。生徒を甘やかしすぎよ」

あたしは見えないようにぷぷと笑った。先生、甘やかしすぎよ、ですって。

「ありがとう。では」

あたしはさっそうと走り去った。他のクラスの担任に怒られた。

「葵さん」

あたしが廊下での小走り搜索を続けていると、呼びとめられたので、一応振り向いてやった。

「なんだ、先生じゃないですか。探したんですよ」

先生があたしの前髪を見てあからさまに、はあ、とため息をついた。

「葵さん、廊下は走らないでください。それに、スカートの丈が短いですよ」

「走ってないです。それに、スカートの丈も短くないです」

あたしはそれなりに高身長な先生の顔を見上げていった。

「それより、部活の話がしたいんです。お時間ありますか」

「放課後にしてもらえませんか。それと、その前髪もどうにかしてください」

「前髪？」

あたしは自分の前髪をつまんだ。なんで？ ふつうですけど。

「前髪は、目にかからないようにしてください。目が悪くなりますよ」

でたよ。

「先生。お言葉ですけど、あたしは視力検査はずっとまえからこの前髪でオールAですよ。それに、篠原さんみたいに、きちんとピンでとめている人が、目が悪くならないとでもいうんですか。まえから思ってたんですけど」

あたしは一番いいかったことを飲みこんだ。

あたしは、自分の心のなかはできるだけいいわないようにしている。だって、むだだもん。だって、どうにかなるわけでもなし。

いくら仲がいいからといって、織や明にもいわない。

あたしの心は、あたしだけのもの。だれにもじゃまはさせないわ。

「もういいです。部室、確保しておいてくださいね。日当たりがよくてきれいなところ」

あたしはそれだけいって先生にくると背を向けた。

先生なら、わかってくれると思ったのに。あたしの思いをわかってくれると思ってたのに。

やっぱり、大人はきらいだ。

どうして大人は、すべてのことを決めつけるんですか。

4 彼女は、放課後に集う。

男の人って、わからない。

「保体って、ひまだよね」

あたしはまっ黒な髪をポニーテールにくくっていた茶色のゴムを静かにとった。

「そうー？ わたしは、すごくないへん」

織がまだ赤い顔を手でかくすようにしながらいった。

織は、ほやほや系美少女によくあるように、それなりに運動神経が鈍い。のんびりしているからだ。

あたしはというと、ふつうだ。

きらいじゃない。好きでもない。いろいろ考えているうちに、保体の時間は体がかってに動いているのだ。

今日の放課後は、いよいよ部活動始動。なんであたしが、二週間も待たされなきゃなんないのかしら。

まあいいわ。気合いいれていなくなっちゃあ！

帰りの会というつまらない時間も過ぎ、『さようならー』と気のぬけたあいさつも終わって、先生はあたしの机にすつと薄い紙を置いたあと、さっさと職員室へと消えていった。

白い紙には太いペンで『二階 多目的室』とだけ書いてあった。

いよいよ始まりました、葵杏理選手による部活動。試合会場は二階多目的室です。

対戦相手は大野勸示選手、二十八歳。教師生活三年、まだまだ新人です。

「解説は佐々木織さん、お願いします」

あたしは織にふった。織は荷物を詰め終わったかばんを回しながら持ち上げていった。

「はあい。よろしくおねがいますう」

「実況は、わたくしに変わりました小泉明さんです。お願いします」
あたしのふりに、明はでかいリュックサックをだらしなく背負いながらいった。

「変わりました、小泉明です。今回の見所は、なんといってもふたりの直接対決。必見です」

なんだ、ちょっとノリノリじゃん。

あたしと織と明は、三人そろって階段を下りた。

「……はよいですね」

先生は三人仲良く並んで座っているあたしたちを見てつぶやいた。

「はよいというより、先生がおそいんですよ。このあたしを、何分待たせれば気が済むんですか、まったく。」

あたしはたんたんといってやった。先生は口を開けて停止している。

「葵さん、ところで何部なんですか、これ」

先生はため息をつきながらいった。まったく、男のくせに、はあはあいってんじゃないわよ。

「うーん、部活というよりは同好会ですね。人数少ないし。これ、書いてきました」

あたしは、百円均一で買った巻物を取りだしてみんなに見せた。

「はい、開きますよ。同好会名は……」

みんなの目が巻物をまっすぐとらえている。あたしはひもをほどこいてするすると開いた。

『SSS同好会』

「うん、我ながらナイスですね。よし、これ貼りましょう！」

あたしは画びょうを用意してさっそく貼りにかかった。

「ちよっと、ぼけっとしてないで手伝ってくださいよ！」

あたしはそのまま停止している三人に呼びかけた。

「ちよっとまってえ、あんり。えすえすえすって、なんのりやくなの？」

織が首をかしげていった。

「もう。先生と篠原礼加を冷めた目で見守る同好会に決まってるじゃない！」

三人とも口があんぐり開いている。

「ちよっと待てよ。なんで大野と篠原を冷めた目で見守んなきゃなんなんだよ」

明が、俺が代表していいますと、みたいな感じでいった。

「あらあ、知らないの？ 先生は篠原礼加が好きなのよお」

先生の顔にふつうな感じではないものが宿っているように見える。顔面蒼白ってやつだ。

「せんせえ、それ、ほんとにほんとうなの？」

織が心配そうにいった。実際は、恋の話に目がないから、かなりわくわくしている。

「ばか、そんなのは……、なあ」

明もこの『生徒に恋する男性教師』という設定に目が輝いている。

先生はあいかわらず顔面蒼白だけど、そんなの知らないわ。このまえ、前髪を切れ切れいったのがいけないのよ。

「葵さん、そんな活動内容では認められないと思いますよ」

先生が、声をだすのもやっと、という表情でいった。ふん、いい気味だわ。

「大丈夫です。先生とそれぞれの進路を考えるってことにすればいいじゃないですか」

あたしはにっこり笑っていった。あの日とおなじ、最高の笑顔で。

「佐々木さんと小泉くんは席をはずしていただけますか」

先生は、まだ、声をだすのもやっと、という声をだしていった。

織と明は、はい、さよなら、といって出ていった。きっと、少し歩いたら一気に話しはじめるんだろう。

「葵さん、お話があります」

先生がいすを持ってきて座った。

「このあいだと、いつてることがうじやないですか。なんで、あのことを話すんですか」

先生は失望したよ、とでもいいたげに額に手をあてている先生を、ちよつとかわいそうだと思った。

「べつに、いいじゃないですか？ 応援してあげるっていつてるんですよ」

あたしは適当にいった。

「それに、あのふたりは口堅いですよ。だれにも話しません」
先生はなおも失望している。

「元気、だしてくださいよ。応援してあげるっていつてるんですから」

あたしはもうめんどくさくなってきたので、席を立った。

「あたし、帰りますよ。もう一回いますけど、応援してあげるっていつてるんですからね」

あたしは静かに戸を閉めた。

応援してあげるって、いつてるのに。

男の人って、わからない。

なぜ、秘密をつくるんですか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1162f/>

今日も、彼女は跳ぶ

2010年10月21日02時09分発行